

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	五箇條の御誓文（懸賞文三等）
Author(s)	中野，峯夫
Citation	龍南會雜誌， 1 6 8： 1 0 2 - 1 1 9
Issue date	1918-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6848
Right	

ひ切つて潔く新生活に入つて行かうと考へてゐた。又方一出来なければ當分留るより外はなからうが、心の底では八重子が居るからと幾分心を慰ませてゐたのだつた。だが一人前にさへなればどうでもなると云ふ氣があるので前者を渴望したのは無論の事である。然しその便りは彼が恐れてゐた通り斷りの手紙であつた……伯父は自己の勢力を扶植するなど疑はれる事業がやり難いので一切推薦はやらぬことにしてゐるから……と云ふことや、欠員の候補者なども多くてなか／＼一存では採用出来ないと言つて來たことなど、大變氣の毒さうに辯解して書かれてゐた。然し彼にはもうそんな辯解は不用であつた。只彼の勝手がましい妄想に對して手酷しくも下された皮肉な結末に茫然としてゐたが、やがて蒼い顔の神經がピク／＼と痙攣する様に見えた。と、突然我にもあらず『ハツ／＼／＼／＼』と軽い空疎な笑ひが込み上げて來た。夫れは自己を極度に虐待して味ふ難行苦行の快感に似た感じでもあり、愚な自己を大喝して冷殺した様な澁い小氣味好さでもあり、又自分はごうしても身動きの出来る様にされてるんだと思ふ、ひし／＼と食ひ入つて來る所の淋しい悲しい頼りなさの様でもあつた。 —【完】—

——(大正七年十月)——

五箇條の御誓文

(懸賞文三等)

一、三、丙 中 野 峯 夫

(一) 緒 論

吾人の目的は『よりよく生きる』といふ事に限られてゐる、幸福なる生活を營む事が吾人の唯一の目的であり

希望である。人は之がために生きがために死す、自ら死に就く者も人の唯一の目的の『よりよく生きる、より幸福な生活を送りたい』てふ事たるを証明してゐると思ふ。人は此の目的を達せんがためには多數にして而かも漸次断へず變遷移動してゐる欲望に使つてゐる。否断へず變移してゐる許多の欲望を、若し出來うべくんば、悉く満足させることが吾人の最も幸福なる生活である。なるべくならば刹那／＼に最も愉快なる生活を送り而かも永久に満足なる生涯を経過したい、熊掌を獲たいと共に富貴も得たい。悲しい哉人間は何といつても小さなものであり限りあるものである。同時に起る欲望の悉くを満足せしむることは不可能であり、刹那の欲望を悉く満足せしめんとすれば之等に繼起する欲望はために障害を受くることがある。即ち吾人の生活には時々矛盾が生じ、分裂が起り、破綻が出来る所以である。

若し吾人にして刹那を享樂すると共に永久に生くることを欲するならば、同時に起る多數の欲望を調節すると共に繼起續發する種々の欲望を齊整して以て矛盾分裂破綻を除去防止して統一ある生活をなし總体として最も大なる欲望の満足即ち最も價值ある人生を送るの必要を感じ従つて又その意欲を生ずるに至るであらう。換言すればある時に於ける欲望を満足させることがある人のその時に於ける最も大なる満足であると共に又之が彼の一生を通じて得るであらう所の最も大なる満足の一分子である様な生活をなすことを欲するに至るであらう。かゝる生活が最も價值あり意義あるものである、即ち最も望ましき生活である。之によつて最も大なる満足を得るからである、即ち吾人の唯一の目的を實現し得る筈だからである。

刹那を享樂しつゝ永久に亘つて最もよく生くるには刹那の欲望を調節し遷移する欲望を齊整するある指標が必要である。刹那の多數の欲望を調節する所の指標は必然に遷移する雜多の欲望を齊整する指標に従屬せ

ねばならぬ。かゝる指標を理想といふ。

然らば理想は刹那に起る多數の欲望を調節し漸次變遷する雜多の欲望を齊整して統一ある生活をなさしむるものであるから何人も眞に生きんとせば理想は必要不可缺のものである。生きんとする人は必ず程度之差こそあれかゝる理想を幾分有つてゐる。欲望が漸次遷移する以上理想も亦漸次遷移すべきは自ら明らかである。吾人はよりよく生きんにはよりよき理想を創設せねばならぬ。要するに吾人眞に生きんが爲めには理想主義の生活を生活せねばならぬ。

刹那のある欲望の満足がその刹那の最も大なる満足であり、同時に之がその人の生涯の最も大なる満足の一成分であるといふ事は、その欲望は横には同時の多數の欲望を代表し縦には遷移する雜多の欲望に通じてゐるといふ事がある。特殊によつて普遍をあらはし刹那が永久を藏してゐる様な生活を象徴主義の生活といふならば、人間の欲望が同時に雜多多様に生起し永久に變遷移動する限りに於て、理想主義の生活は象徴主義の生活である。

理想主義の生活即象徴主義の生活は最も意義あり價值ある生活である。之によつて最もよく生きる即最も幸福なる生活をなし眞の満足を得るからである。自然主義は現實に捕はれて理想を見ることが出来ぬし、抽象理想主義は理想に捕はれて現實を見得ぬ即ち一は理想は現實に即して始めて價值あることを知らぬし他は現實は理想によつて秩序づけられて始めて價值あることを知らないのである。共に吾人の生活法とするに足らぬ。現實に即して理想を求め理想によつて現實を秩序づける理想主義が吾人の採る生活法である。

私は斷言する。人の唯一の目的はよりよく生きることである、よりよく生きるとは理想主義の生活即象

徴主義の生活を生活することである。人間のなすあらゆる活動も社會の營む百般の事業も之を根本基調として批判し論斷し得る、又しなければならぬと私は思ふ。

(二) 本 論

私は我國に於て人間の解放を宣言し個人の價値を認知しその權威を尊重し以て國家の生活を圓滑にしその發展と隆盛とを促進し更に引いて全人類の幸福を増進せんとする意義を有すると思はれる五箇條の御誓文について私の見る解釋を施さうと思ふ。

順序としてその全文を示すならば

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ (ハ)

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ (ニ)

一、官武一途庶民ニ至ル迄其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス (イ)

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ (ロ)

一、知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ (ホ)

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス衆亦此ノ旨趣ニ基キ協心努力セヨ

便宜上私は右に附した番號に應じて解釋する。

(イ) 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

同一の鑄型から取り出された貨幣と雖も嚴密に云へば同一ではない。彼等の占むる空間と時間との差異はさて措きその形象に於てその成分に於てその量質に於て多少の差異は屹度あるに相違ない。實にや宇宙には嚴密なる意味に於て一として全く相同じ者はない。ある者はそれ自ら唯一であり絶對である。けれども又一物として全然孤立して存在するものがあらうか或る部分は他と共通であり、或點は必ず他と關係してゐる。全く同一ならば吾人は夫等の相同じきを認むることが出來ず知らんとする心さへ起らぬ筈である。全く異つてゐても亦同様に之を知ることにも出來ず認んとする意思さへも起らぬ筈である。故に凡ては悉く或點は共通で或點は相違してゐると見なければならぬ。即ち凡ては悉く普遍的なると共に特殊のであり絶對的なると共に相對的である。特殊から普遍が歸納されるのであるが、その特殊の中には已に普遍が含まれてゐる。この普遍によつて更に特殊を演繹するのである。

人も亦特殊性と共通性とを有つて居る。此の特殊性と共通性と相待つて個人を造るのである。故に各個人は特殊性と共通性とより成る個性を所有してゐる。乃ち個人の存在はその個性の發揮によつて意義と價値とを有つてゐる。個性を發揮することは自己を實現することである。自己を實現することは最もよく生くることである。故に最もよく生きんとするには最もよく個性を發揮せねばならぬ。かゝる個人が集つて社會を作り、國家はかゝる個人から成つてゐる。個人を離れた社會も國家も無論ないから。

人は一つの欲望に生きずして多數の欲望に生きてゐる。だから最もよく生くるには數多の欲望中最も自己を實現する様な欲望を撰擇せねばならぬ。即ち最もよく個性を發揮する生活をなさねばならぬ。之が必然に自己の存在する社會に影響し自己と關係する國家に影響する。科學に志す人は之によつて彼自ら最もよく生

きると共に社會生活を點化し、道德に秀づる人は之によつて彼れ自ら最もよく生きると共に社會生活を靈化し、藝術に卓越せる人は之によつて彼自ら最もよく生きると共に社會生活を醇化する。斯の如くして個人と國家は共に最も意義ある存在となり價值ある存在の理由を有すること、思ふ。「各其志ヲ遂ケ」とは正に之を宣明したのである。人の欲望はたへず變遷する。従つて各人の個性も漸次變進するわけである。従つて個性を發揮する生活法も多少新路を開拓せねばならぬ。漸次遷り行く欲望に應ずるため多少新路を開拓して行けば人心は倦怠することなく常に激刺たる活氣に充ちてゐる。眞に各自其志を遂ぐるならば人心の倦怠を來すわけはない。それ故に自己を實現して最もよく生きんがためには『人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス』る。各自はその欲する所に従つて生活してゐるのであるから何ぞ『官武』『庶民』の別差を云爲する要あらんや。各自その能に従ひて最も幸福なる生活をしてゐるのだから宰相必ずしも婢僕より幸福ではない。又必ずしも尊貴とは云へぬ。各自が満足し社會國家をして満足にさせて居れば可なりである。即ち眞に忠實に各自の生活を生活して居れば結構である。要するに各人が悉くその志を遂げ倦まざる生活をせねばならぬ。之れ個人も國家も眞に生くる道である。

(口) 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

人は刹那／＼に生きて居るのである。その刹那が斷たれると人生は斷たれるのである。此の意味に於て吾人は最も強く深く廣く刹那の生活をなさねばならぬ。従つて現實を熱愛し尊重せねばならぬ。然れ共その刹那たるや悠久の過去の繼續であり無窮の未來への連鎖である。過去と未來とを離れて存在することは全然不可能である。現代の生活は過去の生活の繼承であり未來の生活へ發展するのである。即ち吾人の現代の生活

は過去の經驗によつて作られたる未來への生活である。内容たる欲望は未來へ向ふのであるが之を支配する形式は過去に得たものによつてゐる。過去の經驗によつて作られたる生活法によつて新たに起る欲望を調節齊整して現代に生きて居るのである。かゝる生活法は極めて經濟的であつて又賢明なやり方である。蓋し欲望は絶えず變移するけれどもその大部分は過去のものに似てゐるから大体過去の生活様式で生活しても差支へないからである。けれども欲望の幾分は過去のものとは相違せる新奇なものである。それで全然過去の生活法によるわけに行かない。新たな欲望に應ずるために幾分新たな生活様式を用ひねばならぬ。即ち生活を改造する必要がある。然るに不明なるがために此の間の事情に通せず此の事實を覺知し得ないで徒らに固定觀念に捕はれ守舊保守尙古の主義を墨守して生活の改造を敢てしない。ある者は之を知るも敢行するの勇氣を欠ぐ。彼等は之がために回顧主義に墮し保守生活に落ちて潑刺たる進取發展の生活をなし得ない。新たに起る欲望を徒らに抑壓し制止して肉と言ひ物質と卑下して無味乾燥なる仙人生活や不自然極まる禁欲生活をなして人生の満足を獲得しない。彼等は新なる酒を盛るにその用に堪へざる古き囊を依然として使用せんとする者である。個人から云つても國家にとつても各人は潑刺なる生氣を以て活潑たる生活をなす事が必要である。之が爲めには新たに起る欲望を満足させる生活をせねばならぬ。即ち生活を改造せねばならぬ之をなすには先づ己に不要となれる生活様式を破棄せねばならぬ。即ち『舊來ノ陋習ヲ』破らねばならぬ。破壊は建設である。舊來の陋習を破るは正に新なる欲望に應ずる生活様式を作るのである。かくて生活は改造され各人は最もよく生きる。かくの如く新欲望に順應する生活法をとる時、個人は國家の一分子にして國家は世界の一部なる故、その個人は國家に國家は世界に順應する。(此の生活が最も賢明にして徹底的であるから

から多くは無意識に時代と共に環境に順つて變移する欲望満足は最もよく『天地ノ公道ニ基ク』生活法と云ひ得る。要するに新欲望の満足には新生活様式を要する。舊來の陋習を破つて生活を改造せねばならぬ。之れ必然に天地の公道に基く生活である。

(八) 廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ

(二) 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

ベンザム、ミルの徒は最大多數の最大幸福説を唱へた。凡ての個人の欲望を悉く満足させることが社會國家の採るべき最後の目的である。けれども之は理想であつて頗る至難のことである。止むなく最大多數の最大幸福説をとる。最大多數はやがて全部たるの運命をもつて居る。

人は己に久しい間分業をなして來た。それは彼が經濟の原則に應じて最も少い勞力最も多くの幸福を得んがためであつた。アミーバにあつては單一の器官(と云ひ得べくんば)によつて五官に發達すべき感覺を司つてゐる。人は少くも五官によつて専門的に各感覺を知覺する。之は人が一層よく生きる方法であつて人間の進歩を示すものである。人間も原始時代には衣食住を悉く自ら作らねばならなかつた。漸次發達進歩して人は協同生活をするることによつて一層幸福に生きられることを知るに至つた。即ち各その特長に應じてその能力を十分發揮し、自分の生産の剩餘を人に與へると共に、人の生産の剩餘を讓つてもらひ互に有無を交換し長短を填補する協同生活をなすことが各自孤立的に生活するよりも一層經濟であり更に満足なる生活であることを知るに至つた。だから各人の個性に應じてその能力を最もよく發揮するは個人にとつては無論のこと社會的にも最も望ましき事であらねばならぬ。各自の頭が是迄進めば偏狹なる個人主義や頑迷なる專制政治

は起らぬ筈である。然るに人は多くの弱點を有し欠陥を懷いてゐて而も之に氣付かぬ、氣付いても殊更に覆ひ蔽さんとする。自分の欠點には氣付かずして他人の短所をのみ探し、他人の美點を認めずして自己の長所をのみ過大視し吹聴する。その秀ひでたるは或一部分なるに之を誤つて全部と見る。或一點にて優れ居れば以て全体としても勝つてゐると想ふ。専制政治を今日行はんとする者はかゝる誤信に陥つてゐる。一度自己を深く内觀せば如何してかゝる政治を行ひ得よう。又、一度自己の價値と權威とを認知した者は如何してかゝる制度に甘んずるを得よう。

ウオーター、バレンオフトは『造民の時代』は『討議の時代』に先つと云つた。人間は社會的動物ではあるが文化の程度の低い時は我儘勝手を働いて協同生活を破る様な事がありがちであつた。彼等は愚かにも我儘はやがて自己を自ら亡すことを知らなかつた。かゝる時代には賢明なる權力者が上に立つて各人に幸福を與へる様な政策を用ふることは必要である。母に哺るゝ孩兒の如く愚昧なる個人は賢明なる權力者から幸福を與へられねばならなかつた。『造民の時代』は正に之である。文化は進み人知は増した。各人は自己の價値と生存の意義を知つた。そして他人から與へらるゝ幸福に甘んずる事が出来なくなつた。パンを求めて、石を與へらるゝこともあつた。慈悲の御手にすがらんとして笞杖の苦に遭ふことさへあつた。愈他人から與へらるゝ幸福には満足が出来なくなつた。乃ち各自は自ら幸福を求めた。文藝復興に發芽し、フランス革命に高調に達し、現今猶は繼續してゐる制度の改革、政体の變革は皆茲に根ざすのである。今や各人は自ら幸福を創造せねばならぬ。而して協同生活による個人の生活は一層幸福なる生活である。協同生活をなす各人が自ら幸福を作るには互譲し妥協して全体として最も多く満足する様な方法によらねばならぬ。之れ即ち『討議』で

ある。吾人は今や『討議の時代』にあるのである。かくの如き方法によつて得らるべき幸福は必然各人の幸福であらねばならぬ。然し悉くが一致しないならば最大多数の一致によらねばならぬ。それが普通には最大多数の最大幸福である。協同生活は之を目的とするのである。

然らば協同生活の恩恵に與からぬ(嚴密にはかゝる者はあり得ないが)者は如何にすればいゝか。彼等は最大多数の人と意見を異にしてゐる、従つて最大幸福が得られない人達である。彼等は一層深く考察して彼等の所見を比較し、何れが果して眞の満足を得べきかを考へて、彼の意見が是ならば之に従ふべく自説が正ならば更に堂々天下に呼號して同志を糾合してその所信を實現せしめなければならぬ。之を個人について言へばある欲望が理想に働かんとする時吾人の感ずる内部の葛藤である。個人の生活の改造はこの葛藤から生ずると言はゞ國家生活の發展も前者の運動が與つて力あると云ひ得る。

各人が協同生活をなす以上全体としての幸福を増進する様な社會生活をせねばならぬ事は、恰かも、全体として個人の幸福を増進する様に個々の欲望を満足させる必要があるのと同様である。個々の欲望は一個の人間から生じたと同様に、個人は社會から離れて存在することは全然不可能であるからである。協同生活をなす者は、夫故に、自個の満足を社會によつて得ねばならぬ。之をなすには討議の必要がある。最大多数の最大幸福は討議による方法で獲得するより他に良策がない。即ち吾人が最もよく生きんには『萬機公論ニ決スベ』く、萬機公論に決するには『廣ク會議ヲ起』さねばならぬ。實際に採用する方法は時と處によつてその形式を異にすべきも、その精神はどこ／＼までも此の條項に飯せねばならぬ。

各人が右に述べたるが如き心を有する以上『上下心ヲ一』にすべきは勿論のことである。各人は要するに自

己の満足を得たいのである。各人は協同生活を營みて各その特性に應じて能力を發揮し以て自個の満足を得ると共に従つて必然に社會の幸福を増進するのである。故に、『上』に立つ者はその能に應じて自力を發揮し『下』にある者は亦その能に従つて自力を發揮すればよいのである。かくして各その力を認識して自己の權威を尊重し自我の價値を自覺すると共に他人の人格を尊重しその價値を認識してやらねばならぬ。以て上下心を一にするを得べく、従つて一致協同『盛んニ經綸ヲ行フ』ことが出来る。個人生活に於て各欲望を調節すに理想を設くるが如く、社會生活に於ても各人の欲望を調節し齊整してある一定の方向に向はしめる必要がある。社會の理想や『國是』は即ち之である。この國是を達成する手段が經綸である。夫故に經綸は各人の欲望を統一し指導して行く手段である。大なる生活に大なる經綸を要することは自明である。吾人が廣く深く強く生きんがためには須らく『上下心ヲ一ニシテ盛んニ經綸ヲ行フ』べきである。

(ホ) 知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

『若し禁斷の知識の木の實を食つたことが我々の原罪であるならば、知識を以て知識を研究するが如きは更に一層大なる罪惡であらう。しかし我々は己に二つの足に立つた、立つた以上は歩かねばならぬ、歩く以上は走らねばならぬ、走る以上は轉ばぬ用心をせねばならぬ。認識論は一面この轉ばぬ用心であると共に罪惡によつて罪惡を贖ふ等質療法である』とは紀平正實氏がその『認識論』の叙に云へる言葉である。實にや人智を得るは憂の始かも知れぬ。食ひては伏し伏しては食ふ牛豚の生活は或は美まるべきやも知れぬ。而かも吾人は既に牛ではない豚ではない。憂の始にせよ、原罪にせよ、『知識ある者』として生れた人間である。今更牛豚となるわけにはゆかぬ。又なれるものでもなく、なりたくもない。だからこの智識を利用して吾人の幸

福を増進して行くより外に採るべき道はない。苟しくも生きんと欲するからには既定の事實たるこの知識をよりよく利用してよりよく生きなければならぬ。知ある者の憂多きをのみ知つてその喜の亦多きを知らざる者は刺あるバラは妍麗なる毛氈の表を作ること知らざる者である。兎に角吾人は知識の人である。生活の海に漂ふ扁舟を御して彼岸に向はしむる棹楫として知識は與へられた。舟を沈まぬ様に御さねばならぬ。歩いて走つても轉ろばぬ様にせねばならぬ。知識を最もよく用ひねばならぬのである。より深きより廣き知識を得て一層深く強く廣き生活をせねばならぬ。

ダーウインの進化論を待たずして適者は生存してゐる。何人もある時にある所に生れたのである。時と所を離れて生活する事は全然不可能である。時代の中に生き環境の中に存する。何人も境遇に支配される、否各自の欲望は境遇によつて變移する故に最もよく生きる人は最も彼の置かれたる境遇(時代と環境)に適應する人である。従つて最もよく生きんと欲すれば必然にその境遇を人もよく知らねばならぬ。人は悉くその境遇を異にして居る。嚴密に云へば時々刻々境遇は變移して行く。人は生きんがためには之に應じて行かねばならぬ。従つて先づその境遇を知らねばならぬ。ある國はその歴史と國狀とによつて他國と異なる境遇にある。自國の存續を思ふ者は自國を知ると共に他國を知らねばならぬ。即ち個人としても國民としても最もよく生きんためには彼の置かれたる境遇を知る必要があるのである。吾人が生存に一時として知識を欠くべからざるは明かである。吾人が廣く深く生きんと欲すれば廣く深き知識を必要とする。往時の如く銷國の狀態にあつては比較的狹隘なる知識で生活することが出来たのであらうけれども今日の如き個人は直接に國家と交渉し、各人は直接に世界と關係する時代となつては、各人は國家及世界の知識を獲得せねばならぬこ

と、なつた。即ち各人の環境は大いに擴大せられたのである。更に各人の意は宇宙精神にも通じなければならぬわけである。吾人はよく生きんがためには世界に存在する國家の國民として世界に知識を求むるの必要を感じる。かくして所謂時代思潮を解し所謂世界の大勢に通じて以て世界の生活に於て人後に落ちざらんことを期せねばならぬ。『知識ヲ世界ニ求メ』とは正に此の謂である。

國家はその特殊の事情によつて各特殊の成生をなして居るのであつて只單なる主權や國土や人民やから成つてゐるのではない。けれども之を形成してゐる者は要するにその土地に於てかゝる生活をなさねばならぬ様に運命づけられてゐる各國民である。それ故にその國民が全体として幸福なれば必然にその國家は幸福である。各個人が満足して居れば國家も當然満足してゐる。各人が知識を世界に求めて大いに満足なる生活をして居れば、彼等の生活は隆盛であり活潑である。かゝる個人から成る國家は當然又必然隆盛に赴き發展せなければならぬ。各人が知識を世界に求めてよりよく生くるは正に國家が隆盛なる所以であつて、我國に於ては『大イニ皇基ヲ振起』することである。蓋し國家の基礎の鞏固なるは國家生活をなす個人の生活の根柢の不動確固たる所以である。即ち各人の満足なる生活を營む上に極めて賢明なる方便である。國家の基礎の鞏固をはかることは、我國にあつては、皇基を鞏固にすることである。それ故に我國の生活をなす者は各人の生活の保証のためから云つても皇基を振起する必要がある。

(三) 結 論

私は大体に亘つて五箇條の御誓文の御精神を把握し得たと思ふ。少くとも私は右の如く解すべきものだと思

じてゐる。かく解することによつて五箇條の御誓文は確かに我々の生活に最も徹底的に深甚なる意義を有する曠古の大文章であり、永久に價值ある大文字となると思ふ。

吾人の目的は、屢云へる如く、満足をうることである。よりよく生きたいのである。人間のあらゆる活動も社會の百般の經營も悉く之に基くのである。各人は孤立して生活することは出来ぬ、協同生活をなさねばならぬ。協同生活は各自がよりて以て一層よく生活する方法である。人は時間的にあらゆる時代と連續すると共に、空間的にあらゆる事象と關係する。故に時空を通じて萬事萬象に參與する眇たる『我』は宇宙に交通してゐる。否、宇宙は此の眇たる我にあらはれるのである。我は宇宙を創造すとも云はれる。自己を小なり限られたりと云へる私は、茲に於て、自己は無窮無限なりと云はねばならぬ。吾人が獨立を叫びながら他の凡てに關係し、解放を求め乍ら他の凡てに即してゐることを知らねばならぬ。獨立を叫ぶは一層深く凡てと關係を保ち、解放を求むるは更に強く凡てに即せんがためである。

私は個人の眞の満足は必然に國家社會の眞の幸福であるし、國家の眞の満足は當然個人の眞の幸福たるべきものだと思ふ。一見個人と國家を相反せるが如き利害もよく／＼考へて見ると即ち深く廣く大きく徹底的に考へると一致してゐるものである。かくしても尙ほ且つ拈括して相容れない場合がある。社會のあらゆる改革も更に革命もその差の甚だしくして個人の幸福の到底得られずして徒らに教權の壓迫するに堪へられないから發したのである。兎角人は不明にして勇氣なきがために自己の生活の安泰のみ求めてその變遷する欲望に伴ふ生活の改造をなし得ない。社會や國家となりては、かつて優越せしがために得られたる教權を永遠に保持して、新たに起る生活にはそれに適する様な新たな權威者に席を譲ることを知らない爲政者や頭

目が巾をきかせんとする。彼等も眞に賢明にして勇氣を有してゐたならば當然自己及國家に益する様な處置に出でなければならぬ。最も多くの人に最も大なる幸福を與へることが國家のなすべき任務であり目的であるならば、この力を用ふる人は最も之をなすに適する人であらねばならぬ。かゝる人は各自の欲望を最も多く満足せしめ得る人であるから、かゝる人に支配される集團にあつては、全体と部分との利害の相反する場合はないわけである。若しあつても一小部分であつて大部分は幸福に生きられるのである。そこには壓迫もなければ衝突もなく反抗もないわけである。

欲望が時々刻々變遷することは明かなる事實である。けれどもそれは決して激變し急遷するにあらずして徐々と漸遷緩變するのである。だから吾人の生活には左程の變動は起らない。だから大体に於て過去の生活法によつて生活することが經濟的な賢明な方法である。たゞ漸次變遷する欲望に應ずる部分的の改造をすればよいのである。然るにこの部分的の改造をなし得ないのが凡俗の常である。激變に應ずることは出来ても漸遷に順ずることをせぬ、危急に生きて安佚に死すると一般であらう。社會の所謂先覺者は慧眼を以て此の點を洞破したのである、かゝる先覺者を有し而して之に聽く時は社會の生活は常に生氣に充ちてゐる。然るにかゝる先覺者を欠ぐか又は之れに聽かざるに於ては社會の生活は洗滌萎微し勝ちである。過去に一度作られたる生活法に之れ依つて新に起る欲望に應ずる生活をなし得ない、否却つて新たに起る欲望に應ずるを以て罪惡と見る。四圍の事情の異なる過去の生活法によつて現代の變化せる事情の下にある生活を營まんとするのであるから、それが現代の生活法として不適當なるは自明のことに屬する。而も之を得せずして徒らに過去にのみ之れ依るのは、畢竟するに、彼等は吾人の生活は斷えず變遷する欲望によつてのみ得らるゝと

いふ極めて簡單なる事實を正視し得ないからである。かゝる時代の生活が尙古となり保守となるのは當然である。現實と理想とが隔絶される。肉と靈とが天と地とに分離される。精神と物質とが全然別個の範疇に入れられてしまう。國家生活としては、治者と被治者とは全然別になる。治者は壓制する者、被治者は反抗する者ときまつてゐるに様に思ふ。肉を卑んで靈を尙ぶと同様に自己を棄て、治者に盲從せんとする。之もある程度迄はなし得よう。食色の二大欲望を全然捨て、仙人生活をなし得る者の少ないと同様に、自己に即しない治者の政治に永く甘んじ得る人はあまりあるまい。人は自然主義を唱へ自由生活を欲するに至る。かくして改革は起り革命は發する。改革や革命は各自の欲望と之を遂行する方法との甚だしき齟齬扞格を來した時に起るのである。私は、過去の基礎の上に改造するを改革といひ、之迄の基礎を倒して新たな基礎を作る運動を革命と呼ぶ。もとより之をなす人々が過去より未來に生くる以上全然過去と絶縁することはできぬ。

明治維新は改革といふよりもむしろ革命であつた。七百年の武門倒れ、大化以降千二百年中絶してゐた王政は復古した。國民は内國の生活に堪へざらんとしたのみならず、外海の刺激にも堪へざらんとした。自滅を免れ何とかして生きたいと欲する者は此の内外の刺激に適應しその動搖に堪へなければならぬ。是れ即ち明治維新の大運動の招來となつたのである。

政權は王室にかへり、交通は海外と始つた。けれ共未だ形式上のみで實際は上下離れ内外異を立てた。政治は專制であり、思想は偏狹嫉忌と免れなかつた。新に生きんとして折角革命を起したのは結局無意味になりはせぬか。金も要つた人の子も殺した。之を償ふべきものがなければ無意味である。眞に生活の一大改造を要する。五箇條の御誓文は正に此の意味を廣く天下に宣言し給へるのであらう。之あつて始めて明治維新は

有意味であつた。之あつて日本は生きた。吾々日本人は生くるを得た。之は正に吾等日本人の生活を導く炬火である。之によつて、吾人は歩み國家は進む。

實にや明治維新は革命であつた。實に『我國未曾有ノ變革ヲ爲』さざるを得なかつたのである。比較的急激なる變動であつた。紛亂を起し内訌を生じて兄弟の牆に鬩ぐ間に動もすれば外侮を蒙らぬとも限らない。國家の團結を鞏固にし統一を確實にする必要がある。君主は『朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯是是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立』つるに至つた所以であり、人民は亦『衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セ』ざるを得なかつた所以である。かくして始めて存在し得るからである。列國の間に伍して滅亡を免かれ存立を維持し得るからである。従つて人民もよく生きられるからである。

吾人は最もよく生きんがために理想主義をとり象徴主義の生活をやる。個々の欲望を調節し繼起する刺激を齊整して吾人の生活を生活する。各その個性に應じてその特長を發揮する。各自は最もよく生き國家亦生くべし。新なる刺激に應ずるに適當なる生活法を立てんがためには舊來の陋習弊慣を破却せねばならぬ。

かくて吾人は生氣潑瀾たる生活をやる。従つて國家も隆盛であり活氣に充つる。社會生活をやる以上吾人は須らく小我をすて、大我を取らねばならぬ。かくして吾人は一層大きく生きられる。その方法としては廣く會議を起し萬機公論に決する必要がある、上下心を一にして盛に經綸を行はねばならぬ。國家の團結は愈鞏固にその統一は益確實になつて國家と個人との生活は愈益進展する。吾人は之等をなすに當つてその根柢となる知識を世界に求めねばならぬ。あらゆる知識を求めて最もよく生くる方法を案出せねばならぬ。否知識を廣く世界に求むることが吾人の廣く世界に生存する事に外ならぬ。かくの如くにして吾人は最もよく生き國

家は最も發達に赴く。我が國家の發達は正に我が皇基の振起である。

私は、吾人が此の五箇條の御誓文の御精神を眞に咀嚼し体得することによつて最もよく生くる事が出來、最も幸福なる生活を送らんがためには此の御精神に依らねばならぬことを確信する者である。

—(大正七年十月十七日)—

井 間 錄

森 紫 迷

二六時中書齋と學校とに籠城して世間を見る事少きは吾人の不幸なり。見るも皮相に止まり聞くも市井の風聞に過ぎず、今、古反古をこつた返して左の數篇を得たり、一として人前に出すの勇氣有るものなし然れども今龍南の置土産として之を敬愛せる諸兄の面前に置く、厚顔自ら驚くも遂に及ばざるなり。

隣家に肉屋有り、其の規模大にして年々屠殺數千頭に及ぶと言ふ。近時家を毀ちて庭となし以て泉石を築かんとす。其の庭に一碑有り、曰く獸畜追焉之碑と、追焉の語寡聞にして吾未だ耳にせず、其の銘に曰く『某氏見る所有り、其の屠殺する所の獸畜の爲めに追焉して今一碑を立つ、是所謂仁禽獸に及ぶものなり』と手前味噌も此に至て極まれりと言ふ可し。冒頭『君子は死聲を聞けば其の肉を食ふに忍びず』云々なる孟子の語有り、其の生けるを見れば烏魚を食ふに忍びざりしは古聖人なり。今主人年々數千頭を飼育して以て屠殺し店頭常に腥慘の氣に滿つ、彼亦貨殖の道に巧にして家財を貯ふる事鉅萬併せて吝嗇を以て名有り、而も碑を